

# Hotspot Patrol

ホットスポット・パトロール

小宮 信夫

立正大学教授・社会学博士



THE NIPPON  
FOUNDATION

For Social Innovation

# 日本財団の青パト関連事業

～地域づくりの一環としての青パト活動支援～

高齢化社会を迎えて、安心して暮らせる地域づくりが求められています。その一環として地域住民自身による防犯活動が重視されています。2004年の道路交通法改正により、「市民・自治体・警察」の協力体制強化による犯罪抑止を目的として、青パトを使った自主防犯活動が開始されました。しかし、活動が広がる中でいくつかの課題も明らかになってきています。

課題の一つは個人所有の車両を青パトとして使用する場合があります。そのような場合、通常のボディカラーのまま青色回転灯を載せての運行となることが多くなりがちで、青パトと視認されにくくなります。また個人での利用との兼ね合いもあります。

2007年に日本財団は青パト専用車両の配備を開始し、2016年現在で全国各地に約200台の配備助成を行っています。日本財団の青パト専用車は、警察庁の協力で白黒塗装の許可を得ています。「パトロール車両」であることがひと目でわかる外観を持つ専用車は防犯効果が高く、配備されている地域では、防犯に対する啓発と住民同士の協力が向上が報告されています。

また、青パト車両の使用方法も課題の一つです。パトロールをする場合、適宜巡回するだけの「ランダム・パトロール」は防犯効果が低いことが研究結果から明らかになっており、世界的には主流ではなくなっていますが、日本では数多く行われています。

日本財団では、より高い防犯効果があるとされる「ホットスポット・パトロール」を推奨し、財団主催の青パトフォーラム等で学んでいただく機会を提供することにいたしました。本資料はその一助として作成されたものです。

防犯効果の高い専用車両、効果的なパトロール手法の提供、青パトフォーラムでの活動情報の共有など、青パト関連事業を多面的に推進することで、日本財団はより安心・安全な地域づくりを目指します。

# Hotspot Patrol

## 理論編

パトロールを  
始める前に  
知っておきたい  
こと



## 間違いだらけの防犯対策

「人がトラブルに巻き込まれるのは、知らないからではない。知っていると思込んでいるからである」。—アメリカの作家マーク・トウェインはそう語ったと伝えられています。防犯についてもこのことが当てはまります。事件を防げないのは、防犯について知っていると思込んでいるからです。日本の防犯対策では、間違っただけの常識がはびこり、根拠のない思い込みが満ちあふれています。まずはそれに気づくことから始めなければなりません。

犯罪学では、人に注目する立場を「**犯罪原因論**」、場所に注目する立場を「**犯罪機会論**」と呼

んでいます。犯罪原因論は、読んで字のごとく、犯罪の原因を明らかにしようとするアプローチです。犯罪は人(=犯罪者)が起こすものなので、犯罪原因論は犯罪者を重視することになります。「なぜあの人か?」というアプローチです。これに対し犯罪機会論は、犯罪原因を抱えた人がいても、その人の目の前に、犯罪の機会(チャンス)がなければ犯罪は実行されないと考えます。機会を生むのは場所や状況なので、犯罪機会論は犯行現場を重視することになります。「なぜここで?」というアプローチです。

	犯罪原因論	犯罪機会論
注目するのは…	人 	場所 
考え方は…	「なぜあの人か?」	「なぜここで?」
重視するのは…	犯罪者 ↓ 犯罪の原因を 明らかにしようとする	犯罪現場 ↓ 犯罪の機会=雰囲気を生むのは 場所・状況・環境
目的は…	犯罪発生後の 犯罪者の改善更生	犯罪前の 犯罪発生予防

↓

**ポイント!** 領域性=「入りやすいかどうか」  
監視性=「見えにくいかどうか」

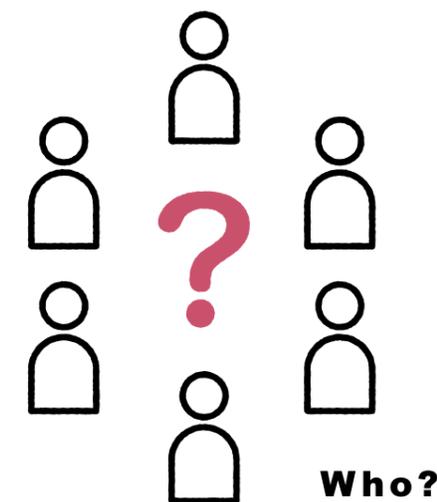
## 不審者は発見できない!

**海外**では、犯罪原因論が犯罪者の改善更生の分野を担当し、犯罪機会論が予防の分野を担当しています。しかし日本では、犯罪機会論は、全くといいほど普及していません。そのため、本来なら犯罪の「事後」に登場する犯罪原因論が、無理やり「事前」に持ち込まれてしまいました。ところが事前(防犯)の世界では、まだ犯罪が起きていない以上、犯罪者は存在しません。そのため、「犯罪者」という言葉も使えません。だがどうしても、犯罪原因論では「人」を指し示す言葉が必要になります。そこで、苦し紛れに登場させたのが「不審者」という言葉でした。その結果、地域では「不審者」を探すパトロールが行われ、学校では「不審者に気をつけて」と子どもに教えるようになりました。こうして、海外では使われない「不審者」という言葉が、日本では、だれもが知っていて、当たり前に使われる言葉になったのです。

このように「不審者」は、もともとボタンの掛け違いから生まれた言葉なので、定義するのは困難ですが、あえて「犯罪者」と「不審者」を正しく区別するなら、「不審者」とは「犯罪を企てている人間」を意味すると考えることができます。犯罪を企てている人間とそうでない人間を識別することができれば、「不審者」が「犯罪者」になる前に発見できる(=犯罪を予測できる)からです。

しかし、そう定義しても、実際にはこの言葉は役に立たないでしょう。なぜなら、だれが犯罪を

企てているかは、見ただけでは分からないからです。むしろ、犯罪を企てている人間は、いかにも怪しい服装をすることはなく、できるだけ目立たないように振る舞うに違いありません。要するに、「不審者」から犯罪を予測することは、実際には不可能なのです。



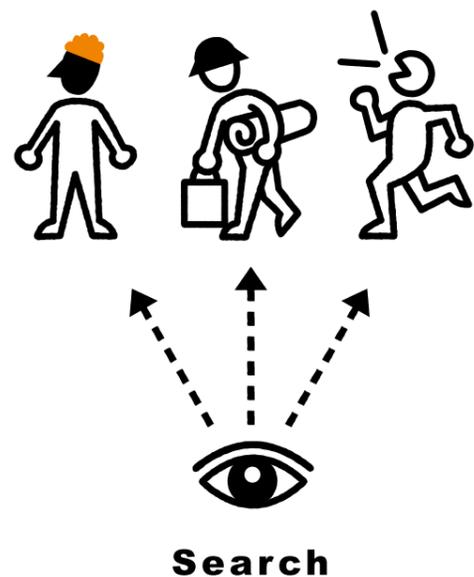
## 地域を壊す 防犯活動

**外見** 上の識別が困難な「不審者」を無理やり発見しようとする、平均的な日本人と外見上の特徴が異なる人の中に「不審者」を求めがちになります。具体的には、外国人、ホームレス、知的障害者を「不審者」と見なすに至るかもしれません。これでは、差別や排除が生まれ、人権が侵害されてしまいます。

さらに、地域の中で「不審者」を探そうとすると、相互不信と無用の対立を招くおそれもあります。例えば、子どもたちは、繰り返し「不審者」に注意するように言われていると、周囲の大人を「不審者」ではないかと疑うようになります。他人を疑えば疑うほど、子どもにとっての「不審者」のイメージは、サングラスをかけている人やマスクをしている人から、普通の外見の大人に広がっていきます。その結果、「不審者」は「知らない人」を意味するようになるでしょう。これでは、大人が信じられない子どもが増え、子どもは大人から離れていくだけです。

人間不信に陥るのは子どもだけではありません。住民がパトロールによって「不審者」を探し続けると、地域には敵意が異常発生してしまいます。なぜなら、パトロールを継続するためにはパトロールをしなければならない理由が必要であり、「不審者」が存在することこそが、その最大の理由になるからです。そのため、不審者探しのパトロールでは、見知らぬ人を「不審者」と見なして、パトロールの成果を誇示しがちになります。そう

なれば、地域における人間関係が分断され、互いに助け合う関係も破壊されるでしょう。皮肉なことですが、「不審者」という言葉が使われれば使われるほど、犯罪が増加するおそれがあるのです。



## 犯罪機会論とは なにか？

日本の防犯対策が間違いだらけなのは、日本だけが、防犯の世界標準である「**犯罪機会論**」を採用していないからです。海外では、犯行の機会（チャンス）の有無によって未来の犯罪を予測する犯罪機会論が、防犯の基礎理論になっています。では、犯罪の機会とは何でしょうか。それは、犯罪が成功しそうな雰囲気のことです。そういう雰囲気があれば、犯罪をしたくなるかもしれません。しかし、そういう雰囲気がなければ、犯罪をあきらめるでしょう。つまり、この雰囲気の有無が犯罪の発生を左右するのです。

雰囲気を醸し出すのは、場所であり、状況であり、環境です。したがって、犯罪が成功しそうな

雰囲気を作り出す場所・状況・環境には、何らかの特徴があるはず。その特徴こそ、犯罪の動機を抱えた人に、犯罪が成功しそうだと思わせてしまう条件なのです。

こうした視点から犯罪機会論は、犯罪者が選んだ場所（犯行現場）の共通点を探ってきました。共通点さえ抽出できれば、それを「ものさし」にして、犯罪者が選んでくる場所（未来の犯行現場）を予測できるからです。こうして導き出されたのが、「**犯罪抑止の3要素**」です。これは、個別の犯罪機会論を統合するとともに、その内容を単純化し、日常生活で手軽に活用できるようにしたものです。

		犯罪抑止の3要素		
犯行場面		物理的な要素（ハード面）	心理的な要素（ソフト面）	
標的	標的	<b>抵抗性</b> 犯罪者から加わる力を押し返す性質	<b>恒常性</b> 一定していて変化しない状態 例：ロック、マーキング、強化ガラス、防犯ブザー、非常ベル	<b>管理意識</b> 望ましい状態を維持しようという意志 例：リスクマインド、指差し確認、整理整頓、健康管理、情報収集
		<b>領域性</b> 犯罪者の力が及ばない範囲をはっきりさせる性質	<b>区画性</b> 境界を設けて他から区別されている状態 例：ガードレール、フェンス、ゲート、ゾーニング	<b>縄張り意識</b> 犯罪者の侵入を許さないという意志 例：パトロール、民間交番、防犯看板、受付記帳、パスポート
		<b>監視性</b> 犯罪者の行動を見張り、犯行対象を見守る性質	<b>視認性</b> 周囲からの視線が犯罪者に届く状態 例：ガラス張り、植栽管理、カメラ、ライト、ミラー	<b>当事者意識</b> 主体的にかかわろうという意志 例：清掃活動、あいさつ運動、一戸一灯運動、花壇づくり運動、ボランティア活動
標的の周辺				

## 犯罪抑止の3要素

「**抵抗性**」とは、犯罪者の標的、つまり潜在的な被害者または被害物に関する要素であり、犯罪者から加わる力を押し返す性質のこと——言い換えれば、犯罪行為に対抗する強度です。抵抗性は、物理的な「恒常性」と心理的な「管理意識」から構成されます。

抵抗性は一人ひとりが高める性能であり、したがって「個別的防犯」の手法と言えます。これに対して、領域性と監視性は人々が協力して高める性能であり、したがって「集団的防犯」の手法です。

「**領域性**」とは、犯罪者の標的の周辺環境に関

する要素であり、犯罪者の力が及ばない範囲をはっきりさせる性質のこと——言い換えれば、犯行対象へのアプローチの難易度です。領域性は、物理的な「区画性」と心理的な「縄張り意識」から構成されます。

「**監視性**」とは、同じく犯罪者の標的の周辺環境に関する要素であり、犯罪者の行動を見張り、犯行対象を見守る性質のこと——言い換えれば、犯罪行為が目撃される可能性です。監視性は、物理的な「視認性」と心理的な「当事者意識」から構成されます。

## 集団的防犯

日本で「防犯」と言えば、抵抗性（＝個別的防犯）を高める取り組みを思い浮かべるのが普通です。しかし、抵抗性に過度に依存することは得策ではありません。防犯ブザーや護身術といった抵抗性の手法に頼るとき、その人はすでに窮地に追い込まれています。このような、襲われたらどうするかという視点は「クライシス管理」と呼ばれますが、それには大きな限界があります。想定した通りの行動がとれないかもしれませんし、相手をより狂暴にってしまうかもしれません。

やはり、絶体絶命のピンチに陥る前に、抵抗性の出番がなくなるようにしたいものです。それを

果たしてくれるのが、領域性と監視性を高める取り組み、つまり**集団的防犯**です。その視点は「リスク管理」と呼ばれています。犯罪者に近づかれないためにはどうすればいいか——これこそが「リスク管理」であり、真の予防（防犯）なのです。

集団的防犯の代表的な手法が「**地域安全マップづくり**」と「**ホットスポット・パトロール**」です。いずれも、人々に領域性と監視性への関心を持たせ、領域性と監視性を高めるデザイン活動やそれを意識したコミュニティ活動をスムーズに起動させるものです。

### クライシス管理

### リスク管理

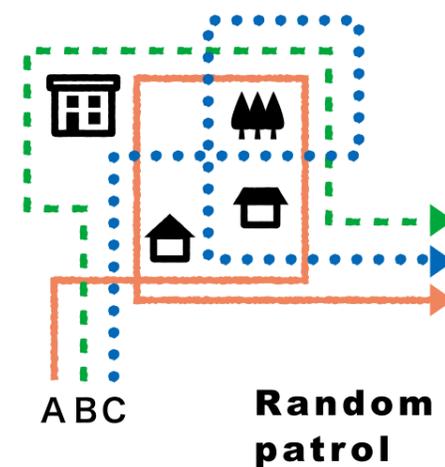
視点	襲われたらどうするか	犯罪者に近づかれないためにはどうすればよいか
手法	抵抗性＝個別的防犯を高める	領域性・監視性＝集団的防犯を高める
例	防犯ブザー、護身術	地域安全マップづくり、ホットスポット・パトロール

## ランダム・パトロールは役に立たないのか？

**日本**では、パトロールと言えば、「ランダム・パトロール」を指すのが一般的です。それは、パトロールのルートを固定せず、パトロールを行うたびに、異なるルートで実施するというものです。しかし、ランダム・パトロールの防犯効果については、科学的な検証結果が示されたことはありません。

学問的に耐えられる形で行うためには、比較対象を設定する必要があります。例えば、A地区におけるパトロールの効果を検証するためには、A地区と地域的特徴（自然、人口、産業、交通など）やその量的・質的变化が似ているがパトロールを実施していないB地区を選定し、両地区の犯罪発生率の変化を比較することが必要です。その結果、A地区の犯罪発生率の減少率の方が大きければ、パトロールには防犯効果があると言えます。しかし、両地区の犯罪発生率の減少率が同一であれば、パトロールには防犯効果が認められず、B地区の犯罪発生率の減少率の方が大きければ、パトロールには犯罪を増やす効果があることになります。

このように、防犯パトロールを実施した地区で犯罪が減ったとしても、それがパトロールの影響であると自動的に証明されません。犯罪が減ったのは、その地区の人口が減少したからかもしれないし、景気が回復したからかもしれません。それとも影響したのは、娯楽品の価格下落か、地域スポーツクラブの設いか、はたまた記録的な大雪かもしれません。どれもこれも犯罪発生率に影響を及ぼした可能性があるのです。



## 科学的 証拠に基づく 防犯対策

**犯罪**の増減は、多数の要因が複雑に絡み合いながら影響が及ぼされるものです。その中から一つの活動(=パトロール)を取り上げてその効果を確認するには、厳密な手順(理想的には活動地区と無活動地区を無作為に選んで行う実験的調査)を踏むことが不可欠であり、短絡的な解釈は慎まなければなりません。

こうした視点から、「証拠に基づく犯罪対策」を提唱するケンブリッジ大学のローレンス・シャーマン教授は、「科学的基準によって有効性が証明された地域密着型のプログラムは一つもない」と述べています。ただし、シャーマン教授は、問題指向型のプログラムについては、その有効性を認めています。

また、テキサス州立大学のマークス・フェルソン教授は、警察官によるパトロールがカバーする範囲について、ロサンゼルス郡を例に試算した結果を、「それぞれの場所が見られている時間は1日につき15秒」「1日の99.98%は警察官に守られていない」と報告しています。

もっともこの計算結果に対しては、実際ほとんどの時間帯に警察官が現れなかったとしても、いつ現れるのかが分からなければ、警察官が至るところにいるという感覚を生むので犯罪は抑止できる、という反論があるかもしれません。しかし、警察官がいつ現れるのかが分からなかったとしても、現れたら犯行をやめればいいだけのことです。ロ

バート・レスラー元FBI捜査官は、ある連続殺人犯の行動を分析し、「彼は毎晩被害者を物色していたが、実際に犯行に及ぶのは状況が理想的なときだけだった」と結論づけています。要するに、やるかやらないかの決定権は犯罪者側にあるのです。



15sec  
24h

## 日本の パトロールの 誤解

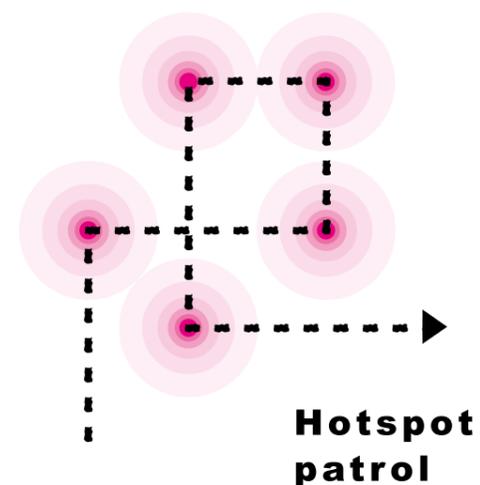
**パト**ロールの本場アメリカでも、かつては日本と同様のランダムなパトロールが推進されていました。しかし、いわゆるカンザスシティ防犯パトロール実験(後述する「割れ窓理論」の提唱者ジョージ・ケリングらが1970年代前半に実施したカンザスシティ警察のパトロール検証)で、その有効性が否定されてからは、ランダムなパトロール手法を支持する犯罪学者はほとんどいません。今では、「ランダム・パトロール」に代わって、「ホットスポット・パトロール」が主流になっています。それは、ホットスポットと呼ばれる「**犯罪が起こりやすい場所**」を重点的に回るパトロール手法です。

ホットスポット・パトロールに関するこれまでの研究結果を分析したハーバード大学のアンソニー・ブラーガ研究員は、「取り組みを犯罪が多

発する場所に集中させれば、犯罪の予防に良い効果がある」と述べ、取り組みを集中させても「犯罪が周辺地域へ転移することはない」と結論づけています。

ではなぜ、日本では未だにランダム・パトロールへの信仰が根強いのでしょうか。その理由の一つが、1996年に警視庁が空き巣犯35人にインタビューした結果です。それによると、空き巣犯が犯行をあきらめた理由のトップは、「近所の人に声をかけられたり、ジロジロ見られたりしたこと」だそうです。この調査結果を踏まえてマスコミも、「犯行前に住民に顔を見られたと思ったら、しばらくその近辺には近づかないのが普通だ」などと伝え、こうした見方が広まっていきました。その結果、パトロール中に下見をしている空き巣犯に遭遇すれば、空き巣犯は犯行をあきらめる、という常識が生まれたのです。

しかし、この空き巣犯の調査は、一見もっともらしいのですが、実はそこには大きな落とし穴があります。この調査の対象は、捕まった空き巣犯です。つまり、レベルの低い犯罪者だけを調べたにすぎません。犯罪の成功と失敗を見分ける基準がその程度だからこそ捕まってしまった、とさえ言えるかもしれません。



## 空き巣犯の 行動 パターン

**警察**の空き巣犯調査の結果は、もし空き巣犯のほとんどが捕まっているのであれば、実態を反映したものとと言えます。しかし、『犯罪白書』（2012年）によると、不法侵入の被害申告率は47.9%であり、『警察白書』（2012年）によると、住宅対象侵入盗の検挙率は53.2%です。ここから推計すると、空き巣の実に四分之三は捕まっていないことになります。

多数派である捕まらない空き巣犯たちの行動パターンについては知るすべもありませんが、そのヒントが得られる事件もないわけではありません。報道によれば、約300件に上る空き巣を繰り返した男は、インターホンを鳴らして留守を確認し、「家人がいても、手帳をめくりながら『この辺りに誰々さんの家はありますか』と尋ねると疑われなかった」と言い、高級住宅地で約200件の空き巣を働いた別の男は、「怪しまれないようブランド品の帽子をかぶって散歩を装いながら、インターホンで家人の不在を確かめるなどして侵入先を物色」していたそうです。どうやら、なかなか捕まらない空き巣犯は、顔を見られたくらいでは犯行をあきらめそうにありません。

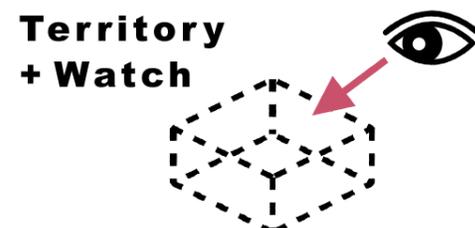
このことは、空き巣だけでなく街頭犯罪一般にも当てはまります。例えば、約900件の車上荒らしを重ねたカップルは、「犬の散歩をしながら無施錠の車を物色」していたそうです。このように、レベルの高い犯罪者は、こそこそと物色したりはしません。彼らは、まだ犯行を始めてはいない以

上、パトロール隊が現行犯逮捕や110番通報をすることはできない、ということを知っています。したがって、ターゲットの物色中に顔を見られても、それだけで犯行をあきらめるとは考えにくいのです。

ランダム・パトロールは、犯行をあきらめさせることはできなくても、犯行を見つけることはできるから、それなりの防犯効果はある、という反論もあるかもしれません。しかし残念ながら、パトロール中に犯行中の空き巣犯を発見する可能性は極めて低いでしょう。なぜなら、レベルの高い空き巣犯は、侵入口（窓とドア）が道路から発見されにくい家を選んでいるからです。つまり、道路を行ったり来たりしているだけでは、仕事中の空き巣犯には、まず気づけないのです。下見の目的も、そういう「犯行が成功しやすい家」を探し出すことにあります。

住民によるパトロールと言うと、とかく「不審者」の発見を目的にしがちですが、それでは意味がないことになります。犯行途中の人間を見つけるのさえ難しいという現実があるのに、ましてや犯行を開始する前にその人間（＝不審者）を特定することなど、非現実的な考え方だと言わざるを得ません。

これが「犯罪機会論」の結論です。犯罪機会論で重要な概念は、**領域性**と**監視性**です。そのレベルが低ければ、そこには「犯行の機会（チャンス）」があり、犯罪が起こりやすくなるのです。



# Hotspot Patrol

## 実践編

ホットスポット・  
パトロールを  
やってみよう



# 1.パトロール場所を決めよう

## 「入りやすい場所」、「見えにくい場所」を特定する。

**領域性が低い場所**とは、分かりやすい言葉を使えば、「**入りやすい場所**」のことです。だれもが「入りやすい場所」では、犯罪者も簡単に、怪しまれずに安心して、標的に近づけます。また、「入りやすい場所」では、だれにも邪魔されずに犯罪を始めることができます。そのため、そこには、目的が達成できそうな雰囲気が漂います。さらに、入りやすいということは、逃げやすいということ

もあるので、「入りやすい場所」では、犯行後すぐに逃げられそうで、捕まりそうな雰囲気はありません。したがって、「入りやすい場所」は、犯罪者にとっては好都合な場所であり、犯罪者に狙われる場所になるのです。

例えば、ロープで囲まれていない空き地、フェンスのない駐車場、幹線道路のそば、校門が開いている学校などは「入りやすい場所」です。



ロープが張られておらず、入りやすい空き地



チェーンがかかっておらず、入りやすい駐車場



フェンスがなく、入りやすい公園



フェンスがあり、入りにくい公園

一方、**監視性が低い場所**とは、分かりやすい言葉を使えば、「**見えにくい場所**」のことです。だれの目から見ても、そこでの様子をつかむことが難しい場所では、犯罪者は容易に、気づかれないまま安心して、たたずむことができます。その結果、標的を探すことも、犯罪を始めるタイミングを計ることも容易です。また、犯行が見つからなければ、だれにも邪魔されずに犯罪を完結できます。

そのため、そこには、犯罪の目的が達成できそうな雰囲気が漂います。さらに、「見えにくい場所」では、犯行が目撃されにくく、警察に通報されることもなさそうで、捕まりそうな雰囲気はありません。したがって、「見えにくい場所」も、犯罪者から選ばれやすい場所になるのです。

## 「見えにくい場所」の4つのパターン。

「**見えにくい場所**」の典型は、死角になることです。しかし、見晴らしがいいところでも（死角がなくても）、田んぼ道や屋上などは、視線が注がれることが期待できないので、やはり「見えにくい場所」です。要するに、視線が集まりにくい場所が「見えにくい場所」ですが、その視線については、物理的な意味だけでなく、心理的な意味も考える必要があります。その一つは、**秩序感が薄い場所**であり、もう一つは、**不特定多数の人が集まる場所**です。

前者のパターンは「割れ窓理論」としてよく知られています。この理論では、「割れた窓ガラス」を、管理が行き届いてなく、秩序感が薄い場所の象徴として用いています。つまり、「割れ窓」は地域の乱れやほころびを表す言葉なのです。割れ窓のほかにも、落書き、散乱ゴミ、放置自転車、廃屋、伸び放題の雑草、公園の汚いトイレなども問題視されます。それらが放置されている場所では、犯罪者に住民の無関心・無責任を連想させ、それゆえ犯罪者からすれば、その場所は、見て見ぬ振り

をしてもらえそうな、心理的に「見えにくい場所」になるのです。

後者の例としては、多くの人が行き交う駅前広場や、買い物客でにぎわう家電量販店が挙げられます。こうした場所では、注意が分散するとともに、援助も他人任せになってしまいます。つまり人が多いほど、事件に気づきにくく、気づいても「自分が助けなければ」と思いにくくなるのです。

なお、街灯があれば「見えやすい場所」になるというのは間違いです。街灯の機能は「夜の景色」を「昼の景色」に戻すことです。したがって、昼に「見えやすい場所」に街灯を設置すれば、夜も安全になりますが、昼に「見えにくい場所」に街灯を設置しても、夜だけ安全にはなりません。後者の場合、「街灯＝安全」と勘違いすると、かえって油断して被害に遭いやすくなってしまいます。シンシナティ大学のジョン・エック教授も、「照明は、ある場所では効果があるが、他の場所では効果がなく、さらに他の状況では逆効果を招く」と述べています。

## 2. 「作戦本部」を作らせない



死角があり、物理的に見えにくい道



死角はないが、物理的に見えにくい道



不特定多数の人が集まる、心理的に見えにくい場所



秩序感が薄く、心理的に見えにくい道



植え込みが高く、見えにくい公園



たくさんの窓から見下ろせる、見えやすい公園

防犯にとって、まず必要なことは、犯罪者が好む場所、言い換えれば、犯罪が起りやすい場所を見極めるための基準として、「入りやすい」「見えにくい」というキーワードを意識することです。この二つのキーワードこそ、犯罪機会論の中核的概念なのです。そしてこのキーワードを、地域レ

ベルで、つまり集団的防犯としてフル活用するのが、ホットスポット・パトロールです。アメリカで盛んなホットスポット・パトロールは、日本の家々が、地域ぐるみで窃盗団に対抗する際にも威力を発揮するでしょう。

窃盗団は通常、サーチエリア(ターゲットの家を探す住宅地)に車で乗り入れ、「作戦本部」として見えそうな場所を探します。次に、そこを拠点にして徒歩や車で下見に出かけます。そして最後に、作戦本部に止めた車の中で、実行の可否や段取りについて話し合います。

とすれば、作戦本部になる場所は重要です。つまりこの場所こそ、ホットスポットなのです。具体的には、入りやすく見えにくい空き地、入りやすく見えにくい駐車場、入りやすく見えにくい公園、入りやすく見えにくい寺社などが選ばれるでしょう。

窃盗団にとって、物色中にパトロール隊と遭遇することは想定内であり、まだ犯罪を始めていないので捕まることはないと思っています。しかし、パトロール隊に窃盗団の作戦本部(ホットスポット)に滞留されたら、彼らはどう思うでしょうか。これから行おうとしている空き巣を、事前に知っているかのようなパトロール隊の行動です。窃盗団が受けるショックは計り知れません。当然、リスクを回避するため、その地区での犯行をあきらめるはずですが、このようにホットスポット・パトロールは、パトロール隊が気づかないうちに、犯罪を抑制する力を発揮するのです。



ホットスポット(入りやすく見えにくい車道外側)



ホットスポット(入りやすく見えにくい駐車場)

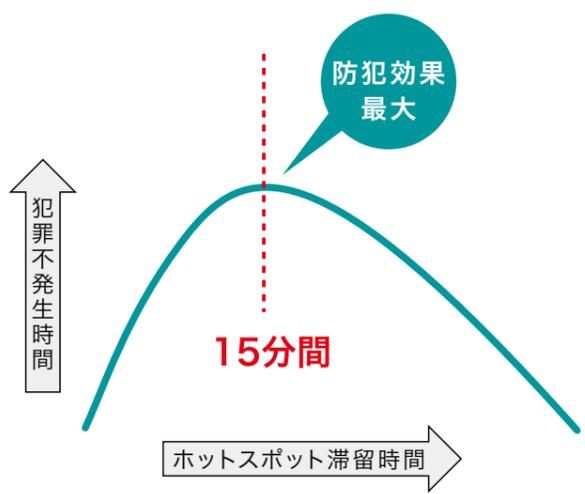


ホットスポット(入りやすく見えにくい空き地)

日本でも、ランダム・パトロールからホットスポット・パトロールへの切り替えが望まれます。そのためにはまず、ホットスポットを探さなければなりません。その作業はそれほど難しいものではありません。(だれもが/犯人も)「入りやすい場所」と(だれからも/犯行が)「見えにくい場所」を探せばいいだけのことです。そこが、未来のホットスポットです。

### 3. 滞在時間は15分!

発見したそれぞれのホットスポットでは、窃盗団にプレッシャーを与えるため、しばらくとどまることが大切です。ジョージ・メイソン大学のクリストファー・コーパー准教授は、データ分析に基づき、ホットスポットに滞留する時間は15分がベストということを発見しました。15分までは、滞留時間が長くなれば長くなるほど防犯効果は高まるが、その時間を超えて滞留していると防犯効果は低下する、というのです。このメカニズムは、「コーパー曲線」と呼ばれています。



15分とは、何やら微妙な時間ですが、なぜそれ以上とどまると、防犯効果が下がり始めるのでしょうか。長くいればいるほど、防犯効果は高くなるようにも思えるかもしれませんが、おそらく、次のようなことなのでしょう。窃盗団が待機している場所に15分間とどまったということは、次の場所(=別のホットスポット)でも15分間とどまることが予想されます。したがって、最短なら15分で戻ってきてしまいます。それでは時間が足りず、犯行を完遂できません。しかし1時間とどまった場合には、次の場所でも1時間とどまることが予想されます。つまり、最短でも1時間は戻ってきません。それなら余裕で犯行を完遂できます。このような意識が働き、防犯効果に差が出るのかもしれません。

15分という数字が、そのまま日本に当てはまるかどうかは分かりません。そうした実験は日本では困難なので、データが取れないからです。しかし、参考になる数字であることは間違いありません。

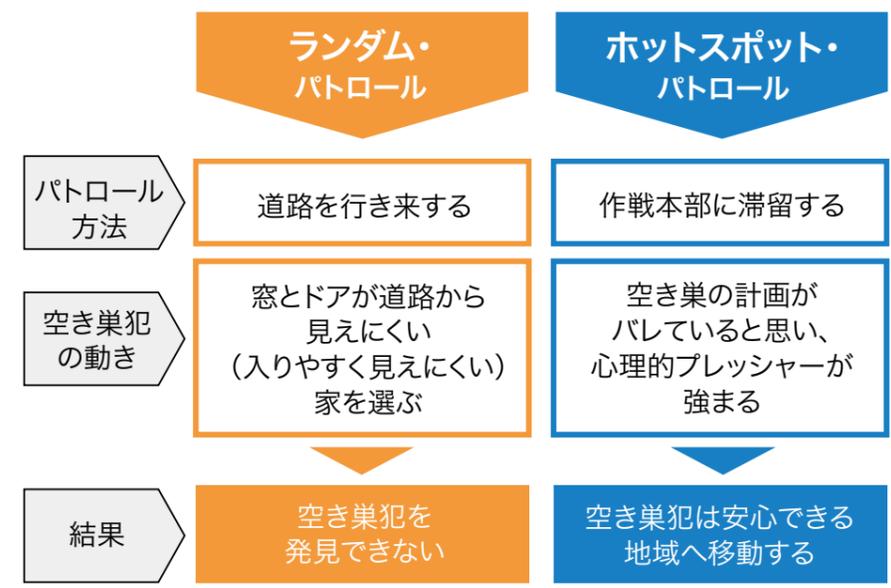
## ホットスポット・パトロールのススメ

単調に見えるパトロールも、ホットスポット・パトロールの方法を採用すれば、心理学や社会学の知見が盛り込まれた、実に奥の深いパトロールに進化します。そして奥の深いパトロールであればあるほど、防犯効果も大きく、また、無理なく長続きする活動にもなります。

ホットスポット・パトロールを通じて、犯罪機会論の知識が深まれば、子どもや家族に防犯のノウハウを伝えることができるようになります。学校に

出向いて、「地域安全マップづくり」を指導するのも楽しいでしょう。

ほかにも、ホットスポット・パトロールは、知的好奇心が旺盛な人たちを満足させ、参加者の脳を活性化させたり、地域への愛着を高めたりするに違いありません。それだけでなく、ホットスポット・パトロールは、防犯に無関心だった人たちにも魅力的な活動と映り、パトロール隊員の増加にもつながっていくことでしょう。



参考文献:  
小宮信夫  
『犯罪は予測できる』  
(新潮新書)





著者プロフィール: **小宮信夫** 立正大学文学部教授(社会学博士)

ケンブリッジ大学大学院犯罪学研究科修了。法務省、国連アジア極東犯罪防止研修所などを経て現職。地域安全マップの考案者。警察庁「新たな安全・安心まちづくりに関する研究会」委員、東京都「地域安全マップ指導者講習会」総合アドバイザー、群馬県生活安全教育アドバイザー、青森県防犯環境設計アドバイザー、宮城県安全・安心まちづくり推進アドバイザー、墨田区「地域防犯リーダー養成講座」総合アドバイザー、藤沢市安全・安心まちづくりアドバイザーなどを歴任。

公式ホームページ「小宮信夫の犯罪学の部屋」<http://www.nobuokomiya.com>

